ﾃｰﾏ：自宅退院後も自己導尿を必要とした片麻痺患者の手技獲得に関わって
～多職種協働における受持看護師の役割とは～

【目的】多職種と連携した関わり及び指導を行った結果、患者本人が自己のおかれている状況を受け入れ、手技獲得後自宅へ退院することができた患者を受持った。その中で看護師の役割について学びがあったため、ここに報告する。

【方法】1)事例紹介 60 歳代女性、配偶者と同居。入院後間歇導尿を継続しながら、自己導尿手技を獲得し自宅へ退院となる。2)障害の受容過程(ｺｰﾝの危機ﾓﾃﾞﾙを使用)に沿って患者を分析し、自己導尿手技練習の実際を振返る

【結果】 ①ﾍﾞｯﾄﾞ上隣で体位保持の練習、動作確認②担当 OT へ左手の動作確認(Br stageⅡ)、ｶﾃｰﾃﾙを設置したﾍﾟｯﾄﾎﾞﾄﾙを作成・試用も使用困難③共に鏡を見ながら尿道口を探し挿入できるよう見守り④練習によりｶﾃｰﾃﾙ挿入・尿器での採尿自立・時間に応じて自身で導尿実施、さらに自身の自己導尿手技に相応しいｶﾃｰﾃﾙの希望が出る⑤退院前他ｽﾀｯﾌの介入拒否⑥手技内容と退院後の環境設定について他ｽﾀｯﾌへ確認

【考察】手技練習をｶｰﾃﾝ内で今後の不安を受容しながら、2 人でﾍﾞｯﾄﾞに上がって行った事により指導過程で受持ち看護師との距離は近くなり、信頼関係はできていたように思えた。しかし、一手技の習得過程や工夫は受け止め方も含め 1 通りではないため、受持ちとして患者本人だけではなく、他ｽﾀｯﾌへの働きかけが必要であることを患者自身へ理解していただかなくてはならなかった。「受持ち」ということに拘り過ぎ、多職種協働内での受持ち看護師としての役割を見失っていたように思う。受持ち看護師としての関わり方は患者個々に対して異なるが、多職種で関わっていく私達の環境は不変である。本事例での経験は今後の自分の看護師としての役割・技術向上にさらに活かせるものと考える。